

氏 名	平田 昌子 (ヒラタ マサコ)
本 籍	東京都
学 位 の 種 類	博士 (学術)
学 位 の 番 号	博士 第 007 号
学位授与の日付	2013 年 9 月 4 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	対話を通して学ぶ「読みの力」 ―教室内外を結ぶ 段階的支援に関する総合的研究―

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	佐々木 倫 子
	(副査) 桜美林大学教授	宮副ウォン裕子
	桜美林大学特任教授	森 住 衛
	立命館大学教授	清 田 淳 子

論文審査報告書

論文目次

用語の定義

第1章	研究背景と概要	1
第1節	研究背景	1
第2節	先行研究	3
	1. 2. 1 JSL の子どもたちをめぐる社会的背景	3
	1. 2. 2 読みの力	4
	1. 2. 3 形成的アセスメント	7
	1. 2. 4 ダイナミック・アセスメント	9

	1.2.5 スキャフォールディング	13
	1.2.6 JSL 児童生徒を対象とした様々な日本語支援の取り組み	17
	1.2.7 先行研究を踏まえて	19
第3節	研究概要	21
	1.3.1 研究目的	21
	1.3.2 調査協力者プロフィール	21
	1.3.2.1 調査協力者 VFN について	22
	1.3.2.2 調査協力者 CMH について	23
	1.3.2.3 調査協力者 CMT について	23
	1.3.3 支援内容	24
	1.3.4 分析枠組み	26
	1.3.4.1 読みの力	26
	1.3.4.2 スキャフォールディング	29
第4節	用語の定義	31
	1.4.1 読みの力	31
	1.4.2 読みの活動	34
	1.4.3 初期指導と教科学習支援	35
	1.4.4 ダイナミック・アセスメント	35
	1.4.5 スキャフォールディング	35
第5節	本論文の構成	37
第2章	教室外における読みの活動	39
第1節	支援内容	39
	2.1.1 交換日記を読みの活動に取り入れる意義	39
	2.1.2 支援方法	40
第2節	分析方法	42
	2.2.1 第一段階 ー参加姿勢による分析ー	42
	2.2.2 第二段階 ー産出内容による分析ー	43
第3節	分析結果	44
	2.3.1 第一段階 ー参加姿勢による分析結果ー	44
	2.3.2 第二段階 ー産出内容による分析結果ー	47
	2.3.3 仲介が与えた影響	49
第4節	考察	53
第3章	日本語支援教室内における読みの活動	55
第1節	料理を題材とした読みの活動	55
	3.1.1 支援内容	56
	3.1.2 分析結果	57
	3.1.3 考察	64

第2節	科学系の読み物を題材とした読みの活動	67
3.2.1	支援内容	67
3.2.2	分析結果	69
3.2.2.1	再話（要約）および内容理解度について	69
3.2.2.2	対話を通じた読みの力	72
3.2.2.3	テキストと読み手の対話	76
3.2.3	考察	78
第4章	在籍学級へ繋がる読みの活動	81
第1節	視覚効果および単語カードを活用した理科の活動	81
4.1.1	理科支援の意義	81
4.1.2	支援内容	82
4.1.3	分析結果	87
4.1.3.1	産出トレーニングと非連続型テキスト	87
4.1.3.2	確認プリントの得点比較	92
4.1.4	考察	95
第2節	二言語併用リライト教材を用いた国語科の活動	99
4.2.1	二言語併用リライト教材とは	99
4.2.2	支援内容	100
4.2.3	分析結果	102
4.2.3.1	VFNについて	102
4.2.3.2	CMHについて	118
4.2.3.3	CMTについて	132
4.2.4	考察	146
第5章	社会への懸け橋となる活動	149
第1節	新聞づくりの活動	149
5.1.1	支援内容	150
5.1.2	分析	151
5.1.3	考察	153
第2節	社会参加を目指して	156
5.2.1	VFNについて	156
5.2.2	CMHについて	158
5.2.3	CMTについて	161
5.2.4	考察	162
第6章	「読みの活動」を支える支援者の役割	164
第1節	マクロ・スキヤフォールディング	164
6.1.1	分析結果	164

6.1.1.1	活動の明確なゴールを示す	165
6.1.1.2	学習活動を注意深く配列する	165
6.1.1.3	メッセージの多様性を利用する	166
6.1.1.4	メタ言語的な気づきを促す	167
第2節	マイクロ・スキヤフオールディング	169
6.2.1	分析方法	169
6.2.2	分析結果	170
6.2.2.1	交換日記を用いた読みの活動	171
6.2.2.2	料理を題材とした読みの活動	173
6.2.2.3	科学系の読み物を題材とした読みの活動	173
6.2.2.4	理科の活動	175
6.2.2.5	国語科の活動	176
第3節	考察	181
6.3.1	マクロ・スキヤフオールディングについて	181
6.3.2	マイクロ・スキヤフオールディングについて	182
6.3.2.1	活動の目的に応じたマイクロ・スキヤフオールディング	182
6.3.2.2	読みの力に応じたマイクロ・スキヤフオールディング	182
6.3.2.3	個性に応じたマイクロ・スキヤフオールディング	182
第7章	総合的考察	186
第1節	支援活動の振り返り	186
7.1.1	教室外における読みの活動	186
7.1.2	日本語支援教室内の読みの活動	188
7.1.3	在籍学級へ繋がる読みの活動	190
7.1.3.1	理科の支援	190
7.1.3.2	国語科の支援	191
7.1.4	社会への懸け橋となる活動	193
第2節	ダイナミック・アセスメントの可能性と問題点	195

参考文献

論文要旨

本論文は、学齢期に來日し、日本の学校で学ぶ子どもたちを対象に、第1章から第7章までにまとめられている。その目的は、(1)読みの力を支える教材、および、その段階的な支援方法を提示すること、(2)ダイナミック・アセスメント（発達最近接領域の概念に基づいた評価法、以下「DA」）の可能性を追求する上で必須となるスキヤフオールディング（一

時的足場掛け、以下「Scf」)の役割とその有効性を明らかにすること、(3)支援と評価を融合させた対話による評価法である DA の可能性と限界を検証し今後の学習支援の方向性を示すことの3点である。

第1章では、日本語を第二言語とする、JSL の子どもたちをめぐる研究背景と日本語支援の現状、および、問題点が挙げられる。また、本論文の重要概念である DA の有効性と問題点が言及され、さらに、研究概要と用語の定義がなされている。第2章では、教室外における読みの活動を取りあげている。ベトナム出身の女子児童 VFN とクラスメートとの交換日記を用いた読みの活動を取りあげ、参加姿勢と産出内容の質に着目した分析がなされている。第3章では日本語支援教室で行われる読みの活動を対象とし、子どもたちの興味関心の高いテキストを用いた活動を分析した。VFN の料理、中国出身の男子児童・生徒 CMH と CMT の科学系の読み物に関するテキストを中心とした活動である。複数のテキストの中から子どもたち自身が選んだもので、内容理解度を測定した。測定には DA を採用し、読みの力について調査・分析を行っている。第4章では、在籍学級で行われる授業への正規メンバーとしての参加を視野に入れた、理科と国語科の教科学習がとりあげられた。視覚効果を盛り込んだリライト教材や単語カード、母語と易しい日本語で書かれた二言語併用リライト教材などを用いた活動である。評価は、第3章と同様に、DA が採用されている。教科学習を日本語支援に取り入れ、在籍学級への懸け橋となる活動を行っている。第5章では、学校外の開かれた社会における情報をとりあげ、情報リテラシーの獲得を目指す新聞づくりの活動を記述・分析している。さらに、JSL 生徒が如何に学校という社会に正規メンバーとして参加していくかを調査し、その過程を明らかにしている。第6章では、閉ざされた仲間内の社会(第2章)から、日本語支援教室内(第3章)、在籍学級へ繋がる活動(第4章)、さらに、社会への懸け橋となる活動(第5章)へと、段階的に行われてきた日本語支援を振り返り、各活動に応じて、マクロ Scf がどのように盛り込まれていたのかの分析を行っている。さらに、DA 中に行われたミクロ Scf を抽出し、如何に児童生徒の個性によってミクロ Scf が変化していったかなどを縦断的に調査・分析している。その結果、研究目的(2)の Scf の役割と有効性が明らかにされた。第7章では、第2章から第5章で行った段階的支援を、支援設計と支援方法の点から振り返り、研究目的(1)である読みの力を支える教材、および、その段階的支援の方法を提示した。さらに、研究目的(3)の DA の可能性と限界を検証し、今後の学習支援の方向性を示した。

本論文には、Scf と DA の詳細な分析が実際の教育実践に基づいてなされているだけでなく、その限界と可能性が示されている。そして、JSL 児童生徒の総合的な読みの力の育成を中心に、個別性を超えた支援方法が提示された。

論文審査要旨

本論文は、学齢期のある時点で国を越えて移動し、日本の学校で学ぶ子どもたちを対

象とする「読みの力」の育成を研究テーマとする。「読みの力」とは何かを明確化し、その獲得を支え、獲得過程を可視化するために、スキヤフォールディング (Scf) とダイナミック・アセスメント (DA) が取り入れられている。

論文査読の結果、まず、形式面の統一の必要性がいくつか指摘された。さらに、用語の定義とおおのの関連性への言及、主張の明確化の必要性が指摘され、それらに基づいて、修正・補足がなされた。

論文の読みの力を支える段階的な支援のためのさまざまな教材・リソースが記述、考察されているが、リライト教材の役割などがさらに問われ、それに応える形の修正がなされた。

分析では、Scf をマクロとミクロに分け、丁寧に記述・分析することによって縦断的に Scf の変化、および、Scf 後の子どもたちの反応を追い、さらに、テキストと Scf を照合せながら DA の持つ可能性と限界を明らかにした。Scf と DA の検証にとどまらず、新たな日本語支援の方向性を示した点が本論文の特色と言えよう。教育・学問的貢献に加えて、論文に一貫性と明解性が加味され、学位論文にふさわしい水準に達しているとの評価がなされた。以上から、主査、副査が全員一致して博士論文として「合格」と判定した。

口頭審査要旨

論文審査の判定を受けて実施された口頭審査では、まず、論文構成が提示され、研究の概要と目的が説明された。続いて、重要概念をとりあげる中で、段階的支援の実践過程とその分析が発表された。それに続き、質疑応答がなされた。

論文全体としては一貫性・独創性が評価される一方で、質疑応答では「大枠」と「要約」との別、DA において信頼性・妥当性を問うことへの疑問、「段階的支援」における「段階」のいっそうの明確化など、細部にわたる質問がなされた。「段階的支援」については、日常生活（交換日記）⇒興味・関心の高いもの（科学/料理分野の読み物）⇒好きな教科（理科）⇒嫌いな教科（国語）⇒社会との関わり（新聞づくり）と徐々に、より既有知識のない、心的負担の重いものへと高める一連の流れが改めて示され、他の指摘に関しても、これまでの本人の考察を示唆する応答がなされた。本研究は個別支援の事例研究という性格を持つが、事例を積み重ねることで、個別性を超えた支援方法につながり、今後への貢献のある研究であることが評価された。

最後に自身の研究を専門用語を用いずに簡潔に説明することが求められ、説得力ある応答がなされた。

以上の内容について審査委員会で検討した結果、主査、副査とも全員一致して「合格」と判定した。